

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2017NEWYEAR

AUGUST



千の刃濤 桃花染の皇姫

* 千の刃濤、桃花染の皇姫 ショートストーリー

半透明な温度

安西秀明

* 千の刃濤、桃花染の皇姫

発売記念マンガ

夏野イオ

* スタッフ対談

＊まえがき

Introduction

こんにちは、オーガストです。

2016年9月、ついに「千の刃濤、桃花染の皇姫」を発売することができました。もうプレイしていただけたでしょうか？

ご感想も続々と届いています。今作からアンケートはオンラインのみとなったためか、熱い思いの込められた長いご感想も多くいただきました。多かったです。感想としては、「(ユースティアと違って)メインヒロインときちんとしたハッピーエンドを迎えられて良かった」「各ヒロインのルートはもっと長く見たかった」などです。スタッフが一通一通拝見しておりますが、圧倒的な熱量のご感想を読むことで、一段と気合いが入っております。もしまだアンケートをご記入いただけていない方がいらっしゃいましたら、ぜひご感想をお聞かせください。(千桃公式ページの「アンケートページ」から、住所氏名等の記入不要にてお送りいただけます!) もちろん、言いたいことが一言だけという場合でも、どうぞお気軽なくお送りくださいませ。

さて2016年といえば、オーガスト初のライブイベント「AUGUST LIVE! 2016」を8月に開催いたしました。オーガストのボーカル曲は、どちらかというとオールスタンディングでボルテージ上げていくぜ! という方向ではないこともあり、ライブとして成り立つのかどうか手探りな面もあったのですが、全曲きっちりライブ用にアレンジしたこともあり当日は予想以上に盛り上がりました。今回の冬コミ及び年明けの通販では、その「AUGUST LIVE! 2016」を完全収録したBlu-rayを発売いたします。初日・二日目に入れ替わったトラックも両方収録しました。あのライブ当日の熱い空気を、ライブにいらしゃった方も、そうでない方も、是非もう一度ご自宅でお楽しみいただければと思います。

そしてもう一つ、2016年11月22日に「機翼のユースティア」、そして冬コミ初日の12月29日には「千の刃濤、桃花染の皇姫」をダウンロード販売する運びとなりました。どちらも、Android版のダウンロードプレイ権が付属しており、PCゲームを同内容のままAndroid端末でもプレイしていただくことができます。なお9/23に発売したパッケージ版「千の刃濤、桃花染の皇姫」にもダウンロードカードを同梱しており、既にスマホ等でのプレイを始めている方も大勢いらっしゃいます。そのうちのお一人からは、アンケートにて「結婚して、子供も出来ましたが、オーガストの作品だけはプレイし続けてます。スマホでプレイできて、大変助かりました」とのご感想もいただきました。(ご結婚おめでとうございます!) 今後も、なるべく多くの方にプレイしていただけるような開発も行って参りますので、どうぞよろしく願っています。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみください。

2016年年末・2017年新春 オーガスト/ARIA スタッフ一同



千の刃濤 桃花染の皇姫



AUGUST

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2017NEWYEAR

- 3 千の刃濤、桃花染の皇姫 ショートストーリー
半透明な温度
- 6 千の刃濤、桃花染の皇姫
発売記念マンガ
- 8 Android™版のお知らせ
- 10 スタッフ対談
- 11 あとがき

半透明な温度

安西秀明

私室の窓から皇帝陵を見つめる。

蘇芳帝の国葬が行われたのは三日前。私が即位したら、改めて葬儀を行いたいとずっと考えていた。夢がようやく実現したのだ。

「私は、お母様のような皇帝になれるのでしょうか？」
皇帝という立場は、その華々しさとは裏腹に孤独だ。

国民は平穏な生活を送れているか、皇帝として恥ずかしくない振る舞いができているか、忠臣を大切にできているか、奸臣の声を恐ろさわされていないか――。不安を挙げれば限りなく、その不安を分かち合う相手もいない。朝まで眠れない日も少なくなかった。

宗仁は伴侶として支えてくれたているが、それとこれとは話が違ふ。お母様はどのようにして孤独や不安に打ち勝っていらったのだろうか？

「(お母様、どうか、私を見守ってください)」

もう増えることのないお母様との思い出を反芻しながら、強く祈る。

扉が叩かれる音で我に返った。

気遣わしげな表情で入ってきたのは古杜音だ。私の心労を察してか、たびたび様子を見に来てくれる。

「朱璃様、お疲れではないですか？」

「私は平気。そっちこそ齋巫女の仕事が大変でしょう。ここにきていいの？」

近頃は、古杜音の「齋巫女という立場」を尊重するよう心がけている。齋巫女は国家を支える要職であり、日々の生活は多忙を極める。古杜音としては善意で会いに来てくれているのだが、それを『齋巫女は自分の仕事を忘れて、今日もお茶会らしい』などと言う者がいるのだ。私のために評判を落としてしまつては申し訳ないし、過労で倒れられても困る(古杜音は倒れるまで止まらない性格だ。赤の他人に戻るつもりはないけど、付き合ひ方には一定のけじめをつけるべきだと思う)。

古杜音と一緒に戦っていた頃のような付き合ひを望ん

でるみたいだけど……。

「そういえば、最近おかしな噂を聞いたの」

「もしや、恋の話でございませうか？」

「違う違う。女官が話してたんだけど、帝宮に人魂が出るみたい」

「ひ、人魂？」

「ええ、ただの見間違いだと思うけど」

笑い飛ばそうとするが、古杜音は腕を組んで考えこんでいる。

「噂とは言い切れないかもしれませんが。先の戦いで神々が顕現したせいだと思ふのですが、このところ、あの世とこの世の境界が揺らいでいるのです」

「人魂が出てもおかしくないってこと？」

「ええ、死者の魂が一時的にさまよい出ているのかと思ひます」

本当にそうなら、あるべき場所に帰してあげたい。

「一度調査する必要があるらうね」



執務が終わった深夜、人魂が現れたという廊下で宗仁と合流した。

「朱璃、怖くても泣くなよ」

「おあいにく様、泣き虫はもう治しましたー」

「相変わらず羨ましくいらひの夫婦仲でございませうね」

宗仁と私の軽口に、古杜音が笑う。

「ねえ古杜音、何度も言ううだけど、調査は私たちがで十分だから」

「寂しいことを仰らないでください。はっ、もしや夫婦の蜜月を邪魔するなという遠回しなお叱り!？」

「ち・が・い・ま・す。齋巫女に無理してほしくないだけ。明日は早朝から儀式があるんでしよう？ 早く戻って寝なさい」

「仲間はずれにしないで下さい。私はただ朱璃様のお手

伝いがしたいだけです」

頬を膨らまし、そっぽを向く古杜音。

「魂と言へば巫女の領分ではないか。無下にするな」

「宗仁様の言うとおりでございませう！」

「あ、こらっ」

宗仁の腕にしがみついた古杜音を引きはがす。宗仁に密着するのは私だけの特権だ。

「ふっふっふ、皇帝陛下といえど、愛しの旦那様を取られては冷静でいられない」様子

「あなたねえ……」

にやりとする古杜音。私を慌てさせて、かつての空気を取り戻そうとしているらしい。

駄目駄目。私は皇帝で、古杜音は齋巫女。しっかりとなくちゃ。

「とにかく、噂話の調査なんて齋巫女の仕事じゃないですよ」

「私は朱璃様のお役に立ちたくて……」

「十分役に立ってくれてるから心配しないで」

「違います。私はもつとお傍で朱璃様をお守りしたいのです」

「今も近くにいるじゃない」

「心の距離の話でございませう。最近の朱璃様は冷たくなりました」

「二人とも、静かに」

宗仁が険しい表情で廊下の奥を指さす。

「っー」

「ひえ……」

いつの間にか、廊下に人魂が浮いていた。青白い篝火のようなそれが、ゆっくりと姿を変え、人の形を取っていく。

簡素な着物をまとった身体は半透明で、奥の景色がうつつらと透けて見える。こちらに背を向けているので顔はわからないが、おそらく女性だ。

「で、で、出ましたね……」



古杜音が私を守るように前に立つ。
宗仁は腰の刀に手をかけ、慎重に相手の出方を窺っている。……魂って斬れるのかな？
違う違う、こんな時こそ、皇帝である私がしっかりしない。

「宗仁は古杜音を守って。私が行ってくる」
「待てこは俺が」

「宗仁様、斬っている私たちに采れたわけではないだろうなどと揉めている私たちに采れたわけではないだろうが、魂はふいっと姿を消してしまおう」

「朱璃様……人魂というのは噂ではなかったようですね」「本物ってこと？」

「古杜音がなぜか明るい顔で頷く。
「相手が魂である以上、ここからは斎巫女の出番でございます。さあ、魂さんの気配を追いましょう」
水を得た魚というか……大義名分を得た古杜音は、意

気揚々と暗闇の中に歩を進めた。

「朱璃、古杜音、少し待ってくれ」
探す、見つめる、消えてしまう……を三度繰り返したところで、宗仁がはたと足を止めた。
「次、奴が出る場所に目星がついたかもしれない」
「どうして？ 規則性でもあった？」

「今までに魂と遭遇した場所を思い出してくれ」
衛兵の詰所前、紫雲殿を囲む廊下、大広間の一角……
特に繋がりはないようだけど。
「どこも、蘇芳帝が小さかった朱璃を連れて散歩していた場所だ」

「はい？ 何で宗仁にそんなことがわかる……」
言いかけて、やめた。宗仁はミツルギとしてお母様に会っているのだ。

「朱璃は覚えていないのか？」
「言われてみれば……うっすらそんな記憶が」
「あと行っていない場所は中庭だけ。次はきつとそこだ」
「確かに魂は生前の行動を繰り返すと言いますが……」
古杜音が気遣うように私を見た。宗仁の予想が当たっているなら、魂の正体はお母様ということになる。

本当にお母様が出てきたら、何を言おう、何を伝えよう――

考えをまとめきれないまま、中庭へ向かう。



「朱璃、いたぞ」

果たして、中庭には半透明の姿があった。
相変わらず顔は見えないが、声をかければ届く距離にいます。

静かに立ち上がり、数歩だけ歩み寄った。
息を吸い、生まれた初めて声を出すかのように、ぎこちなく呼びかける。
「お母様？」

魂がびくりと反応し、ゆっくりと振り向き、その顔立ちは、毎朝、鏡で見ている自分の顔によく似ている。
もう会えないと分かっているが、ずっと再会を願っていた。

話したいことが沢山あった。
皇国を共和国から取り戻したと、多くの臣下に恵まれたこと、愛する人と結ばれたこと……でも、伝えることは叶わない、はずだった。

けれど、目の前で微笑んでいるのは間違いなく、私のお母様だ。
「久しぶりですね、朱璃」
「え？ なぜその名前を？」

「命を落としてからずっと、あなたを見守っていたからです。朱璃、困難を乗り越え、よくぞ皇家の使命を果たしてくれました」
「……はい」

声が詰まって、それ以上は何も言えなかった。お母様に見守っていてほしいという願いは、ずっと前から叶っていたのだ。

お母様の言葉が、愛情となって胸に広がっていく。その優しさに涙腺を刺激される。
「いけない、お母様の前で泣くなって」

「あら、泣き虫はまだ直っていないのですか？」
「な、泣いていません。私は皇帝ですから」
「ふふふ、成長したようですね」

「お母様は、なぜこちらの世界に？」
「あなたに呼ばれた気がしたのです。強い想いは人の心を、魂を引き寄せますから」

確かに、国葬が終わってから、私はずっとお母様を想っていた。まさか、それが原因だったなんて。
「蘇芳帝、初めてお目にかかります。斎巫女、椎葉古杜音でございます」

「お久しぶりです、蘇芳帝」
振り返ると、古杜音と宗仁が深く頭を下げていた。

「斎巫女、ミツルギ……いえ、宗仁殿、皇国をお救い下さりありがとうございます」
ミツルギは代々の皇帝に姿を明かしている。お母様も宗仁の正体は知っていたのだ。

「そうそう、大切なことを言い忘れるところでした」
「は、はい」

お母様は、私と宗仁を交互に見た。
「結婚、おめでとう」
今まで聞いたお母様の言葉で、もっとも柔らかな響きだった。皇帝ではない、母としての言葉であると聞いただけで理解できる。

宗仁と婚約した際、多くの人から祝福の言葉を貰った。けれど、私は誰よりも、お母様に祝ってほしかったのだ。

「ありがとうございます、お母様」
「斎巫女も、朱璃を支えてくれてありがとう」
「滅相もない、私なんて朱璃様からすれば路傍の石ころ程度の存在でございます！」

「朱璃、斎巫女の扱いに問題があるようですが」

「ちよつと古杜音、変なこと言わないで」
 言い合う私と古杜音を見て、お母様が懐かしげに目を細めた。

「ふふ、私も先代の斎巫女とは親しくしていたものです」
 「今の朱璃と古杜音より、親しかったかもしれないな」

宗仁もまた目を細める。

「宗仁殿の言うとおり、彼女は私にとってかけがえのない友人でした。朱璃、今から話すことは遺言だと思つて聞きなさい」

真剣な口調に、背筋が伸びる。昔から、大切なことを教えてくれる時はこんな声になるのだ。

思い出を慈しむように、お母様はゆつくりと話しはじめた。

「朱璃が赤ん坊だった頃の話です。政務で多忙だった私は育児に時間が取れず、あなたの顔を見ない日もあるほどでした」

「皇帝が執務を優先するのは当然のことです、お母様」
 「私もそう思っていました。ですが斎巫女に言われたのです。『執務も大事ですが、少しでも皇姫殿下に時間を分けてあげてください。母としての時間は、皇帝として張り詰めた心を癒やすでしょう』……と」

お母様が一つ息をつき、視線を宙に漂わせる。

「皇帝は孤独な立場です。ともすれば孤独と不安に押しつぶされ、正しい判断ができなくなります」

孤独と不安……それは今まさに私の上に降り積もっているもの。

「ですが、私は斎巫女に救われました。あまたいる臣下の中で、斎巫女だけが友人として私を気遣ってくれたのです」

「今思えば、賢帝と評された皇帝はみな友人に恵まれていたな」

宗仁「が付け足す。皇国を二千年にわたつて見つめてきたミツルギだからその言葉だ。」

「心にゆとりがなければ善政は行えません。こういうと打算的に聞こえるでしょうが、国民の為にも心を許せる良き友人が必要になるのです」

「良き、友人」

無意識に吹き、古杜音を見た。おそらくは後悔の色を帯びているであろう私の視線を、古杜音はしっかりと受

け止めてくれる。

私は、互いの立場にけじめをつけるため、そして古杜音を守るために距離を取ろうとした。仲の良い友人のままではいけなれなれと思つてた。

お母様が優しい表情でうなずく。私の考えていることはお見通しなのだろう。

背中を押されたような気分、私は古杜音に向き直る。

「古杜音」

古杜音に、思いっきり頭を下げた。

「古杜音、ごめん！」

「あ、朱璃様!?」

「私、即位してから肩肘張りすぎた。勝手なことばかり言つてるのはわかつてるけど……これからも友人として私を支えてくれない?」

古杜音は身勝手な私を許してくれるだろうか？ 呆れられて、愛想を尽かされたらどうしよう。

「朱璃様、お顔を上げてください」

「恐る恐る顔を上げると、古杜音が胸に飛び込んできた。二人抱き合ったまま、中庭の砂利に尻餅をつく。」

「私はいつだって朱璃様のお側におります。今まで以上に頼ってくださいませ！」

「う、嬉しいけど、ちよつと離れて」

「だつてだつて、最近の朱璃様は冷たかつたから寂しかつたんでございますー」

ぐりぐりと頭を押しつけてくる古杜音。久しぶりの心地良い体温に頬が緩む。

「朱璃、良い友人を持ちましたね」

「はい、自慢の友人です」

古杜音の頭を撫でながらお母様を見ると、体が先程よりも薄くなつてた。

「お母様、体が……」

「ええ。もう時間のようですね」

「行かれてしまうのですか?」

「いいえ、元の場所に帰るだけです。朱璃、こちらにお母様の前に立つと、しなやかな腕が私を包んだ。身体に実体はなく、肌の感触も伝わってこない。けれど、毛布のように心地よい温もりを確かに感じた。」

「朱璃、元気で」



「はい」

声が震えそうになる。でも、私はもう涙を捨てたのだ。

だから、笑う。

お母様もまた、同じように微笑んだ。

「宗仁殿、朱璃をよろしくお願ひ致します」

「御意」

宗仁は短く答えた。

「古杜音さん、どうか、朱璃と仲良くしてあげてください」

「勿論でございます」

二人の答えを受けお母様が満足げに頷く。

もう声は聞かえない。

お母様の姿は、帝宮の空気に溶け込んでいくように見えなくなつた。

おそらくもう、お目にかかることはないだろう。にもかかわらず寂しさはない。お母様の教えを胸に刻むことができたから。

「私は良き友人に恵まれています。だから安心して見ていくください、お母様」

目に焼き付けたお母様の残像に向けて、私は心の中で

呟いた。





遅れ
来てみれば...

ちよと
古杜
ストップ
音

この感動を
菜摘さんの
替え歌で表現しm



千の刃濤
桃花染の皇姫
好評発売中!!

パッ

まひん

もっと他に
言う事あるでしょ...

みんなー!
せんももプレイしてくれて
本当にありがとう!!

感想ま、こますろ

ひん

千の刀濤 桃花染の皇姫 や 穢翼のユウキアが

Android™ 端末でお楽しみ頂けます



対応のオーガスト作品には、Android 端末用のアプリプレイ権が付属しています。
対応機種をお持ちの方は、ぜひ一度お試しください。

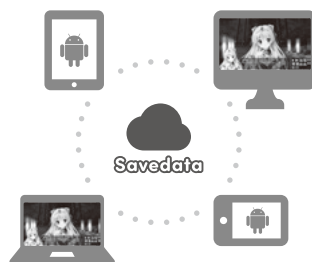
環境を選ばずにプレイ可能

従来のデスクトップはもちろん、タブレットPCや Android タブレット/Phone 等、幅広い端末で環境を選ばずお楽しみ頂けるようになりました。



もちろん、セーブデータは共有可能

インターネットを通じて、各端末同士でのセーブデータ共有が可能。リビングのタブレット端末で、外出先の Android 端末で、いつでもゲームの続きをお楽しみいただけます。



タッチパネルに最適化された、快適な操作を実現しました

タッチパネルに最適化された、従来とは異なるタブレット端末専用の UI を搭載。
パドルを使用した快適な操作で、ゲームをお楽しみ頂けます。



パドルを使用した操作



- パドルに指を乗せている間はオートモードで読み進めることができます。
- パドルから指を離すとオートモードが停止します。



- パドルを上にならすとオート速度が上がります。
- 最上部まで上げるとスキップになります。



パドルをタップすると、マウスの左クリックのように 1 ページごとに読み進めます。



パドルを左・下に動かすと、それぞれに割り当てられた機能を実行できます。機能は任意に設定可能です。

その他の操作



パドル以外の部分で指を押し付けるように回すと、その速度に応じてメッセージを読み進められます。



パドル以外の部分を押し、上下左右に指を移動 (フリック) させると、割り当てられた機能を実行することができます。機能・割り当てする方向は任意に変更が可能です。



タブレット端末をご利用でも、マウス・キーボードを用いた操作は可能です。
※ Android OS では Tablet Mode のみ採用しています。

安寧の日々は灰燼に帰した

黎明から二千年、一系の皇帝により統治されてきた皇国は異狄の手に落ちた。
当たり前だったものが、次々と崩れていく毎日。
時代の奔流に弄ばれながらも、人々は逞しく未来を探し続ける。
たった一人残された帝位継承者《宮国朱璃》は力を求めている。
仇敵を排除し、この国を取り戻さなくてはならない。
過去を失った武人《鶴田宗仁》は主を求めている。
踏え上げられた白刃は、忠義のために振るわれねばならない。
その日、運命に導かれ、二人は出会う。
往く先にあるのは失意か祝福か、答えを知る者はどこにもいない。



千の刃濤 桃花染の皇姫

Android 端末対応作品 好評発売中!

陽炎が如く揺らぐ世界で、 少女たちは幻想を抱き眠る。

「穢翼のユースティア」がWindows10/Android対応の**新装版**となって発売されます。

悲劇は往々にして不条理なものだが、
これほど不条理という形容がしっくりくる悲劇もなかった。

その日、この都市の一角が多くの人命と共に大地へと崩落した。
性別、年齢、人間性、地位、経済力……
権者に一切の区別はなく、
ただそこにいたという事だけが、彼らの命を奪った。
なぜ死なねばならなかったのか。
無数の死に何の意味があったのか。

答えはなく、残された人々に与えられたのは、
輪郭のない茫洋たる喪失感だけだった。
後に《大崩落》と呼ばれる悲劇だ。

あれからずっと、この都市には不条理の雨が降り続けている。
上層から下層へと、都市を濡らした水は低きへ流れ、やがて牢獄に聚まり激む。
嵩を増す汚水を取り除く術もないまま、囚人たちはただ嘆く。

いつの日か、この都市に陽が差す時が来るのだろうか。



穢翼のユースティア 新装版



スタッフ対談

べっかんこう×榊原拓

#43

2016.12.8 16:30 社内にて

榊原拓(以下「榊」) けっこう久しぶりの感じがしますね。対談の時間がやってまいりました。

べっかんこう(以下「べ」) 千桃が発売してしばらくたちましたが、皆さまプレイしてくれましたか？

榊 アンケートも沢山届いているのですが「ごめんなさいまだ開けてません」という方もいらっしゃいました。ご都合の宜しいタイミングで、ぜひ、プレイしてくださいね！さて、開発が終わってみてどうでした？

べ 原画としては、サブキャラが結構いたのでデザイン作業が大変でした。でもイオせんせーと一緒に色々なデザイン案を考えたのは、いままでほとんど一人でやっていた作業だったので新鮮でした。

榊 シナリオはチームでやってきましたけど、原画は企画段階から二人なのは初でしたね。

べ イオせんせーのデザインですが、店長とかお気に入りです。自分からは出ないアイデアが見られるのは楽しいですね。あと子袖は趣味丸出しでなんかすみません。

榊 いや、やっぱり趣味丸出しのキャラって、刺さる人には刺さるんですよ。そういう、作り手の好きが誰かに通じるってのは、作り手冥利に尽きる場所でもあります。

べ サブキャラは比較的自由にデザインできたので楽しかったです。

榊 サブヒロインだと紫乃のデザインが面白いと思いました。紫乃は確か二人の合作なんでしたっけ？

べ デザインと立ち絵は僕が。一部イベントCGはイオせんせーです。今作では基本的な担当キャラは決めているんですが、お互いに手を入れあったりして、結構混ぜてるところがあるんですよ。

榊 こちらも、プロットから本文執筆からその後の修正まで、何度も何度も何度も手が入っているので、混ぜてるところではなかったりします。

べ どこが誰担当なのか気になる方もいらっしゃると思いますが、こんな感じで一概にこうとは言えないんですよ。

榊 まあ、チームみんなで作り上げた作品ということで。……サブキャラと言えは、個人的に今作は五十鈴さんですね。五十鈴さん。ショートカット。あのうなじから後頭部にかけてのラインが神々しく思いました。

べ 五十鈴さんは僕もお気に入りです。髪飾りは古杜音とおそろいなんですよ。

榊 ほんとだ。古杜音はツインテの根元にあるから気づきませんでした。あと五十鈴さんと言えば、伊瀬野の露天風呂で巫女さんによるウハウハ儀式のイベントCGあったじゃないですか。あのシーン、五十鈴さんに裸立ち絵って言うか顔グラが無かったので、泣く泣く巫女服のままの顔グラを使いました。

べ サブキャラは裸立ち絵がないんですよ。

榊 ぐぬぬ……スクリプトやって、あのシーンが一番無念でした。

べ 五十鈴さんは、古杜音との関係性とか、皇學舎時代の話とかの妄想も捗りますね。

榊 皇學舎時代の話は、いつどこかで書けるといいなーと思っています。エピソードも温めてますので。

べ 関係性でいうと、奉り会の面々もいい味をだしてました。

べ おまけシナリオの美よして飲んだくれる話は面白かったなあ。

榊 どうしてもねー、数馬とか陸美さんとかお酒を書くときは、なんとなく筆が乗るというか、筆が滑るというか(笑)

べ しかたないね(笑)

榊 あ、あのおまけシナリオと一緒に飲んでる子袖さんももちろん成人済みですよ？

べ 子袖さんはちょっと背が低いですから！

榊 そうそう。ちょっとだけね！



* あとがき

Postscript

オフィシャルハンドブックをお読みいただき、ありがとうございました。
お楽しみいただけましたでしょうか。

「穢翼のユースティア」と「千の刃濤、桃花染の皇姫」の
Android版（winタブレット版）の開発ですが、こちらは純粋に、
「なるべく多くのお客様に、私たちのソフトを楽しんでいただきたい」
という思いから始めたものです。

デスクトップPCや光学ドライブのついた
ノートPCは徐々に減り、タブレット、
そして何より携帯電話端末が、
個人が自由に使えるデバイスとして主流になりました。
そういったデバイス「のみ」をお持ちのお客様も増えてます。
すると、ソフトの入手方法も当然ダウンロード。
そこで私たちがダウンロードで入手できないソフトを作っていると、
（興味はあっても）プレイできないお客様がいらっしゃるようになります。
またこれは音楽CDについても同様のことが言えるでしょう。

もちろん、これらはメディアやデバイスや流通手段の話で、
私たちが作るゲームそのもの、CGやシナリオや音楽や演出などは
別のレイヤーでの話ではありません。

ただ、漫画が携帯端末を意識すると見開きという表現から
縦にスワイプして読みやすくなる表現へと変化するように、
私たちが作るゲームも、デバイスや流通手段が変わることによって
最適な形を探っていく必要があるかもしれないと考えています。

このあたりについては、2017年の春以降には
何らかのトライをお披露目できると思います。
なるべく早く形にできるよう頑張っておりますので、
もう少しお待ちくださいませ。
なお、前書きでも触れたアンケートにて、
「千の刃濤、桃花染の皇姫」のファンディスクの
ご要望もたくさんいただいております。
こちらも、現在検討を進めておりますので、
今しばらく続報をお待ちいただければと思います。

それでは、今回はこの辺で。
今後ともオーガスト/ARIAをよろしく願い致します。

2016年年末・2017年新春 オーガスト/ARIAスタッフ一同



* AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2017NEWYEAR

企画・制作



<http://august-soft.com/>



<http://aria-soft.com/>

当小冊子の一部のページを撮影し、ブログ・SNS等に転載していただくことは問題ございません。※全ページを複製配布することはご遠慮下さい。



AUGUST OFFICIAL HAND BOOK
2017 NEW YEAR